

## P2M コラム (2)

### P2Mの最近の話題

特非) 日本プロジェクトマネジメント協会理事長 光藤 昭男

毎年、PMAJ<sup>i</sup>では、ENAA<sup>ii</sup>と共同で PMI<sup>iii</sup>の米国大会に人を送っております。今年は佐藤副理事長が参加しました。報告によれば、PMI の米国大会は、昨年まで、一貫して漸減し続け、昨年の米国大会は、1 日 1,700 名の登録参加者となりました。今年は、シカゴでの大会開催でした。米国内はどこからも便利な好位置だったこともあり、2,700 名と大幅に回復しました。減ってきた理由は、10 年ほど前から、米国内中心の「世界大会」を、「米国大会」、「欧州大会」、「アジア大会（シンガポール、中国内など）」と地域に分割したことによる減少でしたので、全世界の総計としては、参加者、会員とも増えてきています。先進国では変動ないかか僅かな減少、インド、中国で増加という傾向です。

PMAJ の秋の「PM シンポジウム」の参加者は、2008 年を底に一環して増え、昨年は 2 日間総勢 2,576 名、今年は同 2,704 名でした。集計法が違うので、PMI との単純比較はできません。ただ、人口比が概ね倍であることを考慮すると、昨年は PMAJ が多く、今年はほぼ同数の参加者比であったと言えます。

さらに興味深い事があります。米国でのプロジェクト 92%は、アジャイル

開発となり、IT だけでなく、ハードモノへの適用も増えてきています。これは驚きです。伝統的な、企画－計画－構築（開発）で PDCA を繰り返すパターンは、大規模、あるいは、公的プロジェクトに限られ、急激に変化する環境に適応させるニーズの現れであるといえます。

PMAJ でも、今年「アジャイル開発の道案内」<sup>iv</sup>を出版しており、日本でも増加しつつあるアジャイル開発へ対応が出版の目的です。

一方、プログラムマネジメントは、PMI から出版された最新版を見ても、大きな変化はありません。ISO も然りです。目標が、曖昧で、不確実性の高いプロジェクトマネジメント方法論は、PMI の支援基金により MIT が Wiley 社から出版した最新本<sup>v</sup>の中でも、P2M がすぐれた方法論である事は変わっていません。嬉しことです。

---

<sup>i</sup> 特定非営利活動法人日本プロジェクトマネジメント協会

<sup>ii</sup> 一般財団法人エンジニアリング協会

<sup>iii</sup> Project Management Institute

<sup>iv</sup> 「アジャイル開発の道案内」近代科学社@2017

<sup>v</sup> Integrating Program Management and Systems Engineering, Wiley@2017